

持続可能な環境を実現するまちづくり

～第4回／寺院を中心としたまちづくり～

菱川 貞義 (NPO 法人いのちの里京都村理事)
浄土真宗本願寺派総合研究所委託研究員

宗門総合振興計画では、現在、その基本方針に基づきさまざまな事業を推進しております。本シリーズ『持続可能な環境を実現するまちづくり』は全四回で、今回が最終回になります。環境汚染や集落の存続の問題への対応策や寺院の可能性について報告いたします。これは、基本方針Ⅰ「仏教の精神に基づく社会への貢献」のひとつである「仏教界の各団体と連携を深め、社会的課題への対応について知見を集約し、社会へ発信すると共に、公教育における宗教知識教育の推進のはたらきかけや孤独死・看取り・自死・いじめ等の社会不安に積極的に関わる」事業のひとつです。

前回までは「環境保全やまちづくりに
おける共同体の必要性」について論じま
したが、今回は事例報告を交え、寺院を
中心とした新しい共同体づくりについて
考えてみます。

■「沖島まちづくり」 プロジェクトについて

浄土真宗本願寺派の運営するホーム

ページ、「他力本願 home」の一企画として「寺院・僧侶を中心としたまちづくり」の実践を試みることになり、都市部と農山漁村部などタイプの異なるモデル地域の選定作業を行いました。最初に選んだのが滋賀県近江八幡市の沖島です。過疎化・高齢化が課題の典型的な農山漁村であること、島に2つある寺院がどちらも浄土真宗本願寺派であり、まちづくりへの理解があり活動もされていたことなど

が主な選定理由です。

沖島は、湖に浮かぶ島では日本で唯一、人が住んでいる島です。漁業が中心で、島内には車は1台もなく、主な移動手段は徒歩と三輪自転車です。昭和30年代にはおよそ800人だった人口が今では300人を切っていて、今後も人口減少の流れは止まらないと予想されています。人口は大きく変動しましたが、暮らしや風景は昔の姿が色濃く残っています。沖島を訪れた人はみな「昔にタイムスリップしたかのようだ」と驚かれるようです。

沖島でのこのプロジェクトの【目的】

【到達目標】【実施内容】は以下のようなものとなります。

【目的】

・過疎化・高齢化地域の持続可能なまちづくり

・「寺院・僧侶を中心としたまちづくり」のモデルづくり

【到達目標】

・持続可能なまちづくりを地域住民全体で共有するための合意形成
 ・持続可能な地域内循環型の経済や福祉づくりのための住民と関係人口による共助や協働の活性化
 ・持続可能な地域環境の保全と経済を両立させる仕組みの構築

【実施内容】

①SOMOSOMO（そもそも）の会

沖島のまちづくり活動は他力本願 net がかわる以前からさまざまに展開されてきましたが、一部の島民を除いて関心度、関与度は高いとはいええず、島民のまちづくりに対する意見（思い・考え）も共有されていませんでした。島民によるまちづくりの第一歩が合意形成であり、そもそも島民一人ひとりがどんな思いをもっているのか聞き取ることからはじめることになりました。お寺を会場に毎月1

回程度のペースで、沖島について住民の思いを語り合う「SOMOSOMOの会」です。第1回の参加者はなんとゼロ人でしたが、回を重ねるごとに徐々に参加者が増えていきました。お寺は語り合う場に向いていて、なごやかな雰囲気の中で忌憚のない思いをたくさん聞くことができました。また、「SOMOSOMOの会」に参加できなかった島民とも思いを共有するために、島の情報紙などへの掲載も行いました。

会に参加された島民の思いを少し紹介します。

「戦後の時点では湖の水は飲めた」

「琵琶湖の漁師でメシが食えないことはないと言われた」

「島で暮らしのすべてが完結していた。120%沖島で生活できた」

「お金はなかったけど、まったくのんびりと、みんなとなごやかに暮らしてきた」

「沖島のいいところは、自然、人情、何かあったら助け合う」

「お寺の日曜学校に通っていた」

「まちづくりを宗教に期待している」

「子どもが外で遊んでも安心」

「山から子どもたちの声がするようになっていいなあ」

「みんなで浜に水を汲みにいって、親戚や近所の者がみんな集まって、ひとつの風呂に入った」

「祭りの翌日は、ご縁とあって、島民みんなで弁当を持って、山へ登って、銘々の場所に座って、弁当を食べながらおしゃべりした」

「沖島は変わってない、と言われるが、沖島も変わりすぎた」

「おばちゃんをスターにしていきたい」

「漁師は残していきたい」

「SOMOSOMOの会」の参加者は高齢者だけでなく若い方もおられました

が、語られた内容のほとんどが共同体にかんするもので、そこに共通しているのは「自然と人、人と人のつながりを大事にしていきたい」という思いなのだ、と感じました。

②ヨシ舟づくりイベント

「SOMOSOMOの会」を1年半ほど続けて、取り組みが島に定着したころ、ひとつの環境イベントを実施する機運が生まれました。沖島の環境やまちづくりに関心を持つ島内外の住民をつなげる目的で、琵琶湖の水環境保全のシンボルであるヨシ（葦）を使って、参加者みんなで舟をつくり琵琶湖に浮かべて乗船してみる、という楽しいイベント「ヨシ舟をつくらう」が企画されました。実施当日は大きな反響があり、沖島小学校の生徒とその保護者、そしてまちづくりに取り組む人たちの約50名が参加しました。また、イベントの様子は、朝日新聞、

毎日新聞、京都新聞それぞれに大きな紙面で紹介されました。

③沖島憲章づくり「千年つづくまちづくり」

「SOMOSOMOの会」を進めながら、さまざまな住民の思いをひとつの沖島の姿として表現する模索もはじまりました。大切にしたい沖島の過去と現在、そして沖島が沖島らしくこれから千年つづくための行動指針が沖島憲章としてまとまってきました。この憲章によって、住民の思いや考えを沖島全体で共有し、さらに多くの意見を引き出していきます。

沖島憲章の全文を紹介します。

【前文】

沖島には人間は住んでいませんでした。

沖島に人間が住むようになりました。沖島は人間に十二分の恵みを与えまし

た。

沖島の人間は島の外も暮らしの一部にしました。

沖島の漁師は琵琶湖を駆け巡り水環境の守り人でもありました。

そうして、ずっと、お寺に寄り添ってひたすらに暮らしていました。

昔と変わらないステキな沖島がたくさん残っています。

昔とはちがうステキな沖島もあります。

沖島に生まれ住み続けている人も、

沖島に移り住んできた人も、

沖島から離れて住んでいる人も、

みんな沖島のが大好きです。

そんな大好きな沖島がずっと続きますように。

【行動指針】

1、沖島の幸せのもとである、おじちゃんおばちゃんを学び続けます。

2、笑顔の漁師をずっと見られるように、沖島の未来を描きます。

3、子どもの声が島のあちらこちらから飛び出す沖島を守ります。

4、島の自然どのお付き合いを増やし、持続可能な開発を楽しみます。

5、のんびりとした時間がもてることを大切にします。

6、安心な暮らしと安心な食の自給自足を高めていきます。

7、島の中と中、島の中と外、人と人がつながる機会をたくさんつくりま

す。

8、お寺とともに互助の暮らしを義理・人情・道徳で彩っていきます。

沖島憲章には、「SOMOSOMOの

会」で話し合われたことをより多くの島民と共有していきたい、また、沖島に関心を寄せてくださる島外の方にも届けたい、という思いが込められています。私

たちはここに綴られている言葉たちに何

を感じるでしょうか。沖島のみなさんのまちづくりへの夢は実にささやかなもの

です。目指しているのは、ただ、ふつうに働けばふつうに食べられる社会です。

だけど、このささやかな夢の実現をとて

も困難にしているのが現代社会なのです。

④ 沖島七夕イベント

多くの住民に沖島憲章を見ていただき、意見をいただく機会として、「SOMOSOMOの会」の拡大版として「沖

島七夕イベント」七夕短冊に願いをこめて」が開催されました。これまでイベ

ントに参加することがなかった住民も多く参加され、100名近い参加者を得まし

た。これだけ大人数が集まるとなかなか

自分の意見を披露するのはむずかしいの

ですが、お寺という場の力も大きかったのか、みんなが意見を出しやすく、また

意見を共有したいという空間が生まれました。地味なイベントですが、意義の大きさを各新聞社も理解してくださり、ヨシ舟イベント以上に大きな扱いで、ローカル紙面だけでなく、朝日新聞全国版に詳しく掲載されました。

⑤地域通貨「共助&協働によるつながり経済」

お金による経済と並行して、地域社会のなかでぐるぐると「生産・流通・消費」をまわし、活発で持続可能な経済をつくっていくための地域通貨の仕組みを提案しました。「SOMOSOMOの会」は地域通貨の裏面に完成した沖島憲章を掲載し、地域通貨を使って沖島憲章の行動指針に沿う形でまちづくりを進めていくことで、沖島憲章への賛同、協力、協働の輪を広げていこうとしています。ただ本格運用には至っていませんが、割引クーポン的な使い方はじめ少しずつ

必要な機能を足していく予定です。

また、「持続可能なまちづくりには自給率が課題であることと、気候変動問題やエネルギー問題への取り組みも欠かさない」という学び合いが生まれ、環境に悪影響を与える廃棄物を排出しないエネルギー（ゼロエミッション）の取り組みとして、新たに薪ストーブの利用や太陽光発電などの勉強会が島民によって自主的にはじまっています。

■「沖島まちづくり」プロジェクトの3年間の評価

3年間の振り返りとして、ご住職や坊主さんへのヒアリングから、予想以上に寺院・僧侶の有用性が明らかになりました。コメントの一部を紹介します。

●住職の責任と影響力が大きく、島民に

とってお寺のみ教えは生きていくうえでのひとつの基準であり、住民どうしの人間関係がこじれるようなときでも、おだやかな方向に向かう力がある。

●例えば、漁師など同業どうしは本音で語ることがむずかかったが、寺院・僧侶があいだに入ること、まちづくりに参加しやすい環境が整った（これまで消極的だった島の重役の方たちも参加するようになり、大学、行政、企業や、島外に住む島出身者等の協力者が増えた）。

●本プロジェクト以前の島民は、イベント続きで疲れたり、まちづくりの方向性に悩んだりしていたが、お寺を中心にじっくりと「持続可能なまちづくり」を話し合うことで、島民の思いの共有と合意形成が進み、ほどよいコミュニケーションが形成された。

など。

寺院・僧侶の人と人をつなぐ力が、地域内外の関係を豊かにし、まちづくりや環境問題解決に寄与することが確認できた社会貢献事例となっています。

■ 持続可能なまちづくり

沖島のまちづくりはまだはじまったばかりです。はたしてゴールはいつやってくるのでしょうか。そもそも、まちづくりにゴールはありません。それでも、新しい共同体が整い、自然環境や社会環境の持続可能性がみえてくれば、折り返し点は過ぎているといえるでしょう。いずれにしても、まちづくりは長い取り組みになります。途中、いろいろなことが原因で挫折しそうになる時が何度も訪れます。楽しくやっていたはずのまちづくりが突然、辛くなったりします。そんなとき、私がまちづくりをするために大切に

していることがあります。

それは

「無理しない、諦めない、嘘をつかない」(嘘をつかなくて済むように行う)

ということです。

無理せず、自分にできることで働き(動き) つづけていれば、必ず実りを手にすることができるよう。私は15年にわたる自然農の経験から、そのことを確信しています。

自然界はすべてにおいて足りています。私は自然農という営みの中で「耕さなくていい、農薬や肥料を使わなくていい、他の植物や虫たちなどを敵と見なさなくていい、なにも持ち出さなくていい、なにも持ち込まなくていい」ということをひとつひとつ理解し、納得してきました。ですから、たとえば作物がうまく育たなかったとしても自然の側に問題があるのではなく、自分の側に何か問題

があったのだらうと考えますし、台風や大雨による被害が出てても静かにそれを受け入れることができます。作物によってはほとんど実りを得ることができなくても、その翌年には豊作だということもよくあります。また、そういった影響の少ない作物もありますし、翌年の分まで備蓄しておけるようなものもあります。

毎年、少しずつ自然への理解が深まりますが、それでもなお、ほとんどのことを知らない無知な私にいます。自然を押し量ることはできません。

それでもただひとついえるのは、問題を自然に押しつけることなく、無理をせず、それでも自分のできることを真摯に働いていけば、必ず実りはやってくる、という事実です。

まちづくりも同じです。無理をする必要はありませんし、特別に変わったことをする必要ありません。うまく進まないことがあっても、その原因を外に押し

つけることなく、自分の中にある問題と向き合い、ひたすらに自分ができることを続けていけば、まわりとつながり、働けば必ず恵みがやってくる持続可能な社会へと変わっていくでしょう。

■ 寺院・仏教が支える持続 不可能ののちのつながり

経営学者であったP・F・ドラッカー（1909〜2005）がその著書『非営利組織の経営』の中で日本での寺院のあり方を評して「最古の非営利組織（NPO）は日本にある」と語っているように、古くから寺院は公益性を発揮してきました。永い歴史を持つ寺院は自治体や企業よりも遙かに長期的な視野を有しているので、地球環境問題や貧困問題への対応など「持続可能な社会や地域のあり方を、より本質的に考えることができるのではないのでしょうか。また、自己中心性とそれに伴う犯意なき搾

取が加速し、世界が破滅へと向かっているいま、自分と他者の「いのちのつながり」を思い、欲を慎む仏教の思想が求められているように思います。

私たちは、昔の生活様式や地域共同体に戻るのではなく、今における持続可能な社会へと向けて、それぞれが、それぞれの地域の中で、足りている地域のあり様を考え、新しい共同体作りあげていく必要があります。そこでは、寺院もまた、地域のあり方に沿った役割を発揮していくことが求められています。持続可能なまちづくりへの道のりを閉ざそうとする、私たちの自己中心性。それを振り払うときには、寺院の持つ仏教の力が大きな助けとなるでしょう。寺院にはそれだけ大きな可能性が秘められているのだと期待しています。

菱川貞義（ひしかわ・さだよし）

講演社こども美術学園講師、印刷会社、デザインプロダクションを経て、1989年に広告会社（株）大広に入社。デザイン、コピー、プロモーション、プランニングの仕事をするが、地球環境プロジェクトチームとして滋賀県・NTT共同プロジェクトに参画し、「市民参加型情報ネットワーク」の社会実験「びわこ市民研究所」を運営。

2006年から環境に負荷をかける自然農を実践。

2008年には「25研究所」を社内ベンチャー組織として立ち上げ所長に就任。

2012年に農村再生をミッションとするNPO法人いのちの里京都村を設立。

2014年からは浄土真宗本願寺派総合研究所の他力本願netのプロジェクトに参加、委託研究員として「1000年続く地域づくり」をテーマに、まちづくり、セミナー、ワークショップ等を行う。